



日総研トップ | 情報誌トップ

Web連載

**注目!** がん看護における  
**最新エビデンス**



**石井容子**  
自治医科大学 看護学部  
基礎看護学分野 講師



**宮下光令** 教授  
東北大学大学院 医学系研究科  
保健学専攻 緩和ケア看護学分野

第62回

外来がん患者の症状等の  
セルフモニタリングが  
救急外来の受診と入院を減らす

Akina Natori, Vandana Devika Sookdeo, Tulay Koru-Sengul, Matthew Schlumbrecht, Carmen L Calfa, Jessica MacIntyre, Roberto M Benzo, Patricia I Moreno, Tracy E Crane, Sofia F Garcia, Frank J Penedo. Symptoms and Needs Monitoring in Diverse Ambulatory Oncology Patients : Usage Characteristics and Impact on Emergency Room Visits and Hospitalization. J Clin Oncology. 2023, Vol.41 (2) 285-294.

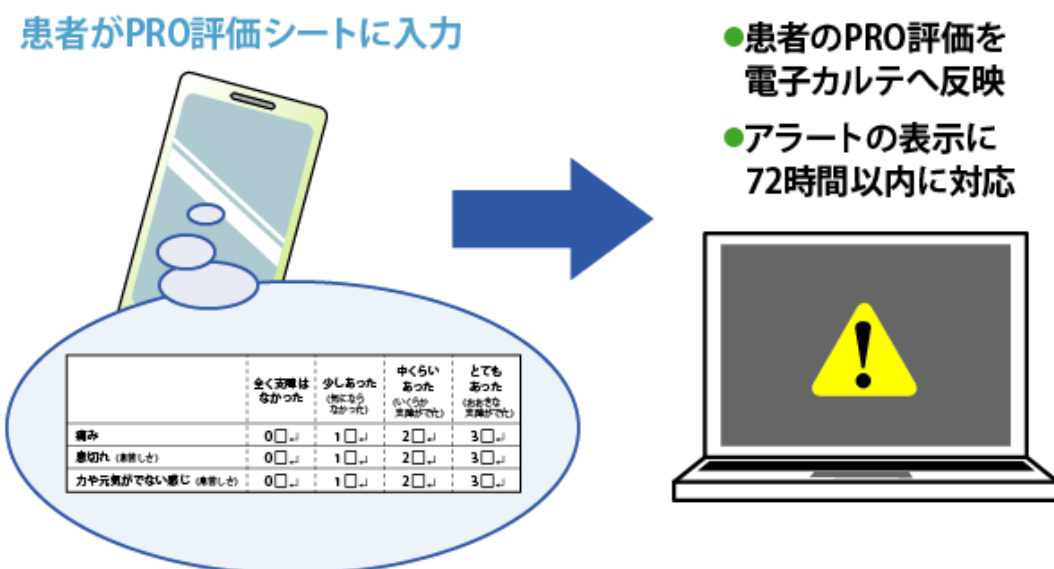
Patient-reported outcome (PRO:患者報告型アウトカム)とは、評価尺度を用いて痛みや不安などの身体・心理的な症状を患者に直接尋ね、主観的な評価を測定する指標です。患者の症状は一般的に主観的であり、医療者はそれを過小評価する

ことが先行研究から明らかになっています<sup>1)</sup>。また、このPROを評価することで、患者のQOLが向上したといった研究結果も示されています<sup>1)</sup>。このような研究の動向から、最近ではPRO（評価尺度）を臨床で活用する動きが見られるようになりました。

そこで、本稿では、PROを活用して外来のがん患者に症状などのセルフモニタリングを行うと患者の救急外来の受診や入院が減ったという結果を示したアメリカの後ろ向き研究を紹介します。

この研究では、患者が携帯やタブレット端末を用いて、PROの評価シートの身体症状や心理面に関する項目に回答し、その内容が電子カルテ上に反映されるというシステムを活用しています。医療者は、患者の外来受診日の72時間前に患者のPRO評価の情報をカルテ上で得られます。患者がPROで自分の状態を報告すると、アラート機能が働き、医療者はアラートを受け取ると、72時間以内に患者のPROの報告へ対応をすることとしました（**図1**）。

**図1 本研究の患者のPRO評価に関するシステム**

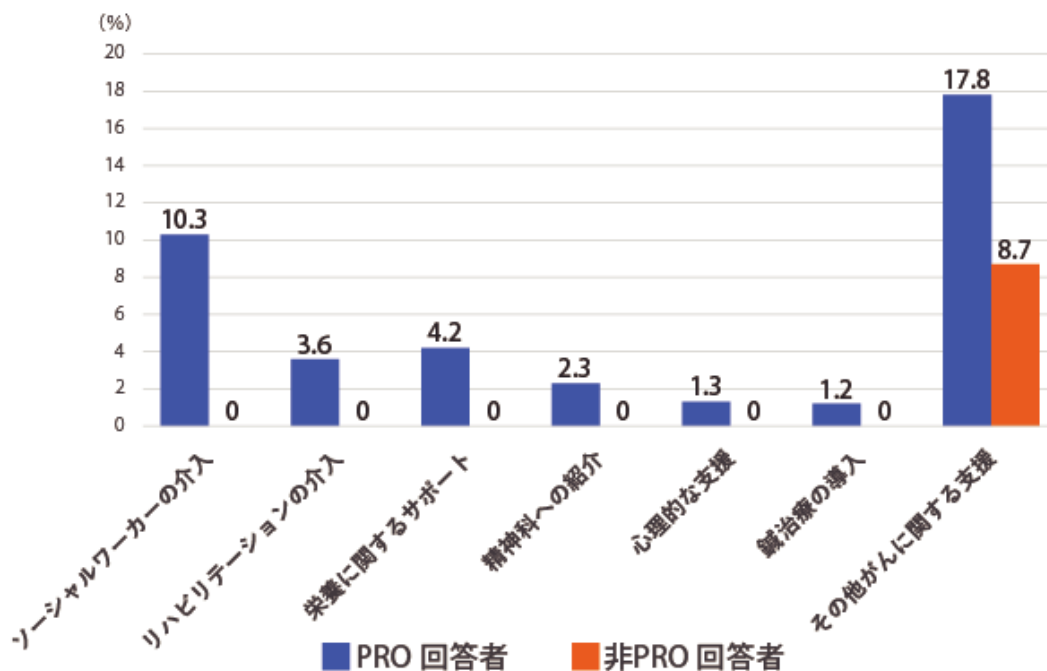


9,553人の外来のがん患者を対象に調査が実施され、このうちPROの評価シートに回答したのは、4,117人（43.1%）でした。回答者のうち、PROの評価シートの全項目の評価を完了したのは2,760人（67.0%）でした。PROの評価項目では、患者の訴えが多い順に、不安がある（86%）、抑うつ状態にある（71%）、痛みによる日常生活の支障がある（71%）、疲労感がある（68%）、身体機能に支障がある（66%）、栄養不良にある（12%）という内容でした。また、65歳以上の患者、男

性、配偶者またはパートナーがいない患者、積極的治療をしていない患者ほど、統計的に有意にPROの評価シートに回答できていませんでした。

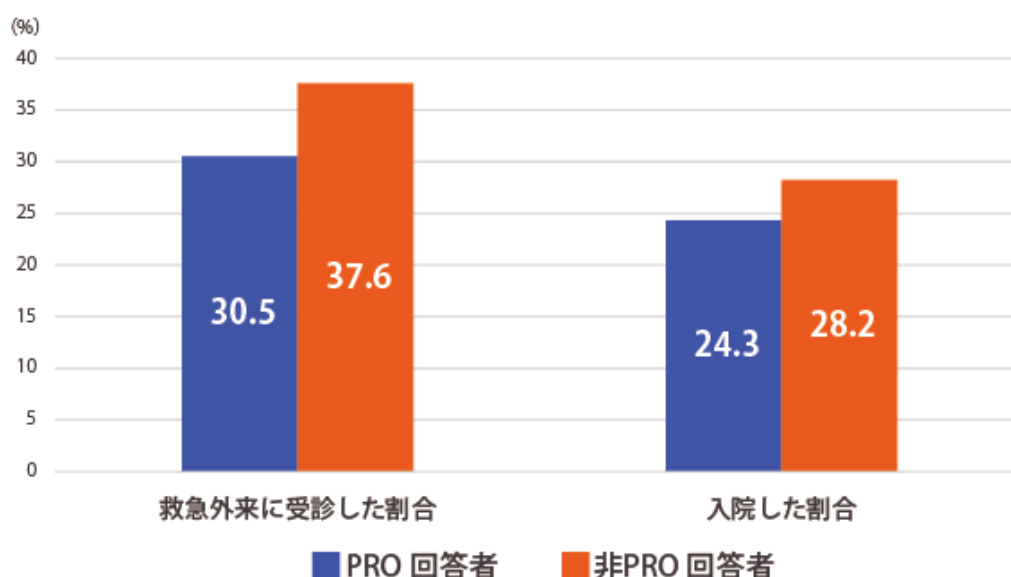
アラート機能については、4,117人の回答者のうち、555人の患者に941の身体症状のアラートが生じていました。アラートから72時間以内に医療者が対応した内容とその割合は、身体症状へのサポートは82%、心理的なサポートは84%、社会的なサポートは68%、栄養面のサポートは92%でした。また、PROに回答した患者の方が、PROに回答していない患者よりもこれらの医療者のサポートを多く受けていることも分かりました（図2）。

図2 PRO回答者とPRO非回答者のサポート支援の利用状況



さらに、PROの回答者は、非回答者に比べて救急外来の受診と入院が有意に少なかったという結果も示されています（図3）。

図3 PRO回答者とPRO非回答者の救急外来受診と入院の割合



この研究から、患者自身が自分の身体状況を評価するPROの活用により、医療者がタイムリーに患者に必要な支援を提供できることが分かりました。PROの活用は、患者のニーズに早期に対応できるメリットがあると言えるでしょう。そして、患者のニーズに対応する支援が提供されたことから、PROの回答者は救急外来受診や入院が少なかったという結果が示されたことが考えられます。このように、PROの活用が患者にとっても医療者にとってもメリットがあることが明らかにされました。

我が国でも臨床でのPROの活用が進んでいますが、その活用により患者のケアニーズが充足され、さらなるケアの質が高められていくことが期待されます。

#### 引用・参考文献

- 1) Basch E, Deal AM, Kris MG, et al : Symptom monitoring with patient-reported outcomes during routine cancer treatment : A randomized controlled trial. J Clin Oncol. 2016. Vol.34 (6) 557-565.

---

いしいうこ：22001年北里大学看護学部卒業後、東京慈恵会医科大学付属病院に5年間勤務する。その後、訪問看護ステーション勤務、がん研究会有明病院勤務を経て2010年東京大学大学院 看護学専攻 緩和ケア看護学分野 博士前期課程を修了する。その後、那須赤十字病院に8年間勤務し、2018年から自治医科大学看護学部に勤務する。また、2023年東北大学大学院 保健学専攻 緩和ケア看護学分野 博士後期課程を修了する。

みやしたみつり：1994年3月東京大学医学部保健学科卒業、臨床を経験した後、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻助手・講師を経て、2009年10月東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア

看護学分野教授。専門は緩和ケアの質の評価。

この商品の内容に関するお問い合わせは[仙台事務所](#)  
お急ぎの場合は、TEL (022) 261-7660におかけください。  
※土・日・祝は対応していません。

ご注文に関する内容・変更・追加などのお問い合わせは、  
お客様センターフリーダイヤル0120-057671に  
おかけください。

※本サービスは事情により予告なく終了することがございます。  
あらかじめご了承ください。

ページトップに戻る



Copyright© nissoken. All Rights Reserved.

お客様センターフリーダイヤル 0120-057671